

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520413

研究課題名（和文） 指導・実践場面における「言語運用能力」の再定義に向けて

研究課題名（英文） Reconsidering “communicative competence” in instructional and performative settings

研究代表者

片岡 邦好 (KATAOKA KUNIYOSHI)

愛知大学・文学部・教授

研究者番号：20319172

研究成果の概要（和文）：現代的なコミュニケーション能力を構成する要因について、様々な日常実践における伝達の成否を考察し、そこに共通する要因として、言語使用におけるスタイルの「変移」、合意形成に向けた参加者間の「共創」、および非言語的要素を活用した（広義の）「身体化」という特徴が遍在することを提案した。その成果は、各種研究会や学会での研究発表、国内外の出版社からの論文集および専門誌特集号（継続中）という形で結実した。

研究成果の概要（英文）：By investigating various factors that constitute a modern notion of “communicative competence,” I examined different outcomes of communicative intentions in everyday practice, proposing that what underlie beneath them are such features as “variability” of language use, “collaboration” of participants toward mutual achievement, and “embodiment” of verbal and nonverbal elements in communication. The outcomes from the project include numerous presentations at meetings and conferences and an edited volume of collected papers and a (ongoing) special issue project for an international academic journal.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| 2011年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2012年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,800,000 | 840,000 | 3,640,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：伝達・運用能力（コミュニケーション能力）、教育・指導場面の談話分析、マルチモーダル分析

1. 研究開始当初の背景

「言語運用能力」という概念は、Saussure によるラングとパロールの分類、ひいては言語学における「言語能力」(competence) と

「言語運用」(performance) の対立に端を発する 20 世紀言語学の 2 大潮流のひとつに由来する。特に後者の研究は、北米言語人類学者 Dell Hymes によって、「文法知識を含む言

語使用のための言語文化的な知識・技能」を射程に収める能力と定義された。しかし 20 世紀末以降の多様なメディアの出現の中で、当初想定された以上に研究対象やテーマも拡散しつつあり、「言語運用能力」の意義も刻々と変化している。また、Hymes の「SPEAKING モデル」は言語運用能力を分析するための要素と客観的な枠組みは規定したものの、そこから得られた知見を社会的に還元するという視点が希薄である点是否めない。

そこで本研究においては、「communicate」の本来の語義である “to share with others” という視点に立ち返り、「指導・実践」という高度に人間的な行為場面に注視することで、本研究で「伝達共有能力」として敷衍する、「参与者間の理解と共有」までも含めた、言語に限定されない包括的運用能力の解明を目的とした。具体的な分析対象として、(1) 語学教育現場、(2) 救命措置の指導現場、(3) 工場／工房などの製作現場における技術指導、を取り上げ、言語／非言語／環境要因のなかのどのような要素が相互理解と知識・技能の共有化を推進する誘因となるのかを検討した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、さまざまな「指導・実践場面」において依拠される「伝達共有能力」の諸要素を可視化することで、「言語運用能力」(communicative competence: Hymes 1972) の概念を理論的かつ実践的に再検討することにある。20 世紀後半以降における「コミュニケーションの民族誌」研究を端緒として、「言語運用能力」の定義は話し手／書き手の能力から聞き手／読み手を含めた相互依存的能力へと変化し続けている。

その変遷を踏まえ、本研究では「聞き手への指向性」が最大限に発揮される典型例として、さまざまな「指導・実践」場面における言語使用を取り上げた。そして、言語人類学によるマクロな視点と会話／相互行為分析によるミクロな視点を融合させることで、社会において共有された言語観（言語イデオロギー）と身体、環境を含むマルチモーダルな方略が、どのように「指導の理解」と「技能の共有」を定着させる要因となるのかを検証した。その際に、高度産業化社会に典型的な「マニュアル型」（つまり同一情報の一方向的）指導法の功罪を、「定型」とその「拡張・逸脱」を許容する創造的実践という観点から再検討し、現代社会において求められる実践的な「伝達共有能力」のあり方を考察・提案

することを目指した。

よって、本研究の 3 年の実施期間内に、以下の問いに順次答えていくことを旨とした：(1) 知識の伝達／技術指導という人間にとって根源的なコミュニケーション活動において、多様な指導場面に共通する、「理解と技能の共有化」を推進するための方略を同定する。

(2) 上記(1)の考察を通じ、共有化のための「指導・実践」に通底する文化的規範と相互行為のプロセスを検討する。具体的には「暗黙知 (tacit knowledge)」と参加者が協働で築く「創発知 (generative knowledge)」の相互作用に着目する。

(3) 上記(1)、(2)における知見から、異なる言語・文化で嗜好される、より効果的かつ実効性の高い「指導・実践」のあり方を提案する。

3. 研究の方法

本研究は 3 年をもって完結することを目指した。そのための方法として。最初の 2 年間は研究代表者および分担者による「個別研究」とグループ全体での「共同討議／ワークショップ」による 2 並列で研究を推進した。この間、研究代表者と分担者は個別にフィールドワークとデータ収集を行い、談話資料の書き起こしとともに分析を進めた。

最終年にあたる平成 24 年度は、研究分担者が研究組織から外れたため、研究代表者が主に単独でこれまでの研究成果をまとめる年度と位置づけた。具体的には、(1) 研究成果の集大成であるコミュニケーション能力をテーマとした書籍の出版、(2) 学会・研究会・専門誌等における新たな成果の公表、そして(3) 予定された未収録データの補充収集である。

4. 研究成果

本研究によるおもな成果は、(1) 研究課題である「コミュニケーション能力」を多角的に論じた研究発表と、(2) それらにもとづく論文集の刊行である。これらを通じて、従来個別に論じられてきたコミュニケーション能力の全体像を示すとともに、将来的な応用に向けた提言を行った。

(1) まず研究発表としては、平成 24 年度中に片岡の主な活動母体である社会言語学会や日本語用論学会、国際語用論学会等において、教育・指導・職業実践にかかわる研究発表を行い、参加者からさまざまフィードバックを得た。これらをもとに研究を深化させるとともに、更なる発表機会へとつなげるこ

とができた。

(2) 論文集については、まず研究代表者片岡と分担者池田が、2011年2月に片岡の本務校、愛知大学にて、ラウンド・テーブル「伝達能力を再考する」を開催し、同年6月に池田の本務校である関西大学にて第13回言語科学会シンポジウム(Reconsidering “Communicative Competence”: Findings and suggestions from fieldwork/ empirical research)を開催した。これらの機会は、その後の論文集刊行と専門誌特集号を見すえて企画され、発表者には刊行を前提に発表と論文執筆を依頼した。まず、前者のラウンド・テーブルにおける発表論文の多くは、「コミュニケーション能力の諸相—変移、共創、身体化—」というタイトルで平成25年3月にひつじ書房より刊行された。そこにおいては、コミュニケーション能力の現代的特性を「変移」、「共創」、「身体化」という3つのキーワードから検証します。

また、後者のシンポジウムの概要は、「日本言語科学会」が発行する学会誌、*Studies in Language Sciences*の12巻に収録予定である(印刷中)。さらに、Elsevier社の言語学・談話研究の専門誌、*Language & Communication*において当該テーマで特集号を組むことが了承され、片岡・池田の他にアムステルダム大学人類学部教授Niko Besnier氏を編者に迎えて編集作業がほぼ終了した。執筆者は、上記シンポジウムの発表者に加え、編者のネットワークを駆使して国内外から言語教育、言語人類学、談話研究の専門家を迎え、2013年秋の刊行を目指している。

最後に、当初予定しながら十分にデータ収集が行われていない対象分野があった。具体的には、新たなテクノロジーを用いた日本語教育場面と、職業実践における談話データがそれに当たり、国内外にて数回データの補充を行い、当面の分析に必要な書き起こしデータのアーカイブ化をほぼ完了した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計13件) 以下主要論文のみ:

① Ikeda, Keiko, Kataoka, Kuniyoshi, et al. (in press). Reconsidering “Communicative Competence”: Findings and Suggestions from Fieldwork and Empirical Research. *Studies in Language Sciences* 12. (査読有)

② Kataoka, Kuniyoshi (2012). The “body

poetics”: Repeated rhythm as a cultural asset for Japanese life-saving instruction. *Journal of Pragmatics* 44: 680-704. (査読有)
(DOI: 10.1016/j.pragma.2011.09.019)

③ Kataoka, Kuniyoshi (2012). Toward multimodal ethnopoetics. *Applied Linguistics Review* 3(1): 101-130. (査読有) (DOI: [10.1515/applirev-2012-0005](https://doi.org/10.1515/applirev-2012-0005))

④ 池田佳子 (2012). 「政治家のインターアクション」『日本語学』31(4):36-50. (査読無し)

⑤ Kataoka, Kuniyoshi (2011). Verbal and non-verbal convergence on discursive assets of Japanese speakers: An ethnopoetic analysis of repeated gestures by Japanese first-aid instructors. *Japanese Language and Literature* 45 (1): 227-253. (査読有)

⑥ 片岡邦好 (2011). 「道案内の指差しに見る「絶対/相対参照枠」の主観的融合」『人工知能学会誌』26(4): 323-333. (査読有)

⑦ 片岡邦好 (2011). 「間主観性とマルチモダリティ: 直示表現とジェスチャーによる仮想空間の談話的共有について」『社会言語科学』14 (1): 61-81. (査読有)

[学会発表] (計25件) 以下主要発表のみ:

① Kataoka, Kuniyoshi (2013, February). Multi-activity in media discourse: A case study of a Japanese TV commercial. NII Shonan Meeting (February 17-20, 2013). Shonan Village Center, Kanagawa Pref.

② 池田佳子・片岡邦好 (2012, August) 「海外の日本語教室場面における空間配置行動—マルチモーダルの視点から行う『教室分析』—」日本語教育国際学会 (2012年08月18日~2012年08月20日) 名古屋大学.

③ Kataoka, Kuniyoshi (2012, May 6th). Intersubjective Co-construction of Virtual Space: A Multimodal Analysis of Japanese Route-finding Discourse. The 6th Conference on Language, Discourse, and Cognition (CLDC 2012). National Taiwan University (invited speaker).

④Kataoka, Kuniyoshi (2012, March). Synchronic and diachronic variation of spatial “frames of reference” (FOR) in Japanese wayfinding discourse. Workshop on “Contact dialectology and sociolinguistic typology” (March 19, 2012). National Institute for Japanese Language and Linguistics.

⑤Kataoka, Kuniyoshi (2011, December). “Trading places” and intersubjective understanding of spatial perspectives: Symposium on “Aspects of meaning in discourse. 14th Annual Meeting of the Pragmatics Society of Japan (December 4, 2011). 京都外国語大学.

⑥Kataoka, Kuniyoshi (2011, July). An ethnopoetic multimodal analysis of instructional discourse: Patterned gestural repetition as an implicit cultural norms. The 12th International Pragmatics Conference at University of Manchester, UK (July 3-8, 2011).

⑦Kataoka, Kuniyoshi (2011, June). Introductory remarks at the Symposium, “Reconsidering ‘communicative competence’: Findings and suggestions from fieldwork/empirical research.” JSLs 13th conference at Kansai university (June 25, 2011).

⑧片岡邦好 (2011, February) . 「適切に伝える／伝わるとはどういうことか？－座標にもとづく空間語彙の分析から－」 「伝達・運用能力を考える」ラウンド・テーブル (愛知大学 豊橋キャンパス: 2011年2月19日／20日)

⑨Kataoka, Kuniyoshi (2011, January). Spatial frames of reference (FOR) and cognitive dispositions in way-finding discourse. *Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition: Towards an Integration of Language, Culture and Cognition*. (University of Otago, Dunedin, New Zealand; 21-23 January 2011).

⑩片岡邦好 (2010, December) . 「『相対砕言語』における絶対的な指差しについて」 日本語用論学会第13回大会 (2010年12月4日: 関西大学 千里山キャンパス) .

⑪Kataoka, Kuniyoshi (2010, September). Synchronic and diachronic variation in the use of spatial frames of reference: An analysis of Japanese way-finding discourse. *Sociolinguistics Symposium 18*. (University of Southampton, UK: September 3, 2010).

⑫片岡邦好 (2010, April). 「人命救助講習における身振りの繰り返しについて」 身振り研究会ワークショップ. (2010年4月24日: 国立情報学研究所)

[図書] (計2件)

①片岡邦好、池田佳子 (2013) 「コミュニケーションの諸相—変移・共創・身体化—」 片岡邦好、池田佳子 (編) , ひつじ書房, iii～v, 1～28

片岡邦好, 229～260

池田佳子、アダム・ブランド, 191～224

②Ikeda, Keiko (2013). Audience Participation in Politics Interactional Analysis of Political Communication in Contemporary Japan. Kansai University Press, 205 pages.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 邦好 (KATAOKA KUNIYOSHI)

愛知大学・文学部・教授

研究者番号: 20319172

(2) 研究分担者(ただし平成22～23年度のみ)

池田 佳子 (IKEDA KEIKO)

関西大学・国際部・准教授

研究者番号: 90447847